

New Leader 2004 新塾長紹介

『知をもって律するは志なり』

入塾して初の塾主講義で、塾主より『何のために生きているのか』と質問されたが答えられず「日々、自問自答して3年間過ごした」と米山塾長。

1年目はさほど積極的に参加しなかった。2年目の長岡研修で先生の一挙手一投足に感動し「心は目に見えないのに、人はなぜ心で動くのか」と質問をしたところ、塾主より氷山に置き換えた素晴らしい回答を頂いた。この時、今までの1年余りを棒に振っていたことを痛感し後悔したという。この経験から生まれた3塾の基本方針。1年目は、塾主を知り、塾生を知り、そして自分を知る『知の行動』。自分を知ったら、2年目、自分を活かす。『自分は何のために生きるのか』を明確にする『律の行動』。3年目では経営理念・経営計画

を確立する『志』。これを基に自己啓発・相互啓発を行い、塾主の『人間主義的経営哲学』を持った真の経営者の輩出を目指す。具体的には「常に経営者の立場をはずさず、目的を明確にし、お互いに約束事をつくり指摘しあう」「できない場合は理由を考え、気づいたら改善する」と塾長。

また「時間をつくる。そして素直になって受け入れる。学んだ事は実践し、自分の社業に活かし、塾にて結果を報告することが重要」と。

大きな声に、がっしりした体格。一見、近寄りやすい雰囲気。米山塾長であるが、全て自分の経験を基に語られる話は、実に明確で分かりやすい。「共に学び、共に行動しましょう。そして結果を出しましょう」とメッセージを送る笑顔は、自信に満ち溢れていた。

(2塾 鈴木大也)



米山利信塾長

39塾

『自立共創』

青経塾での現役時代、遠山塾主はじめ多くの仲間たちとの出会いから「人は一人では何もできない、お互いが支えあい守られながら生きている」ということを教わりました。「経営者として成長するためには“人の心に響く人間性”を磨かなければならない、全ては人が基本です」と言われる田中塾長。自身が受け取った火種を新塾生に伝えきろうと、田中塾長の意気込みは熱く、そして想いは深い。

新塾テーマは“自立共創” “新塾生にとって青経塾で学

ぶ3年間は、一人ひとりの人生をかけた大仕事になるはず。3年間を通し社会に通じる人格や価値観を学び、仲間や社会と共に成長していきます」と、どこまでも人間主義だ。

「人は手作りのものに感動する。その心の動く瞬間を大切に積み重ねることで人間として成長し、青経塾に微力でも恩返ししたい」と、語られた言葉の中に、重い責任を受けて立つ決意の固さが感じられた。

(3塾 加藤 忠)



田中和生塾長

40塾



遠藤公俊塾長

『明るく』

「第4青経塾は、基本理念を「明るく」とし、共に学び、共に体感し、未来永劫に研鑽する同士となる。明るくとは先見性・世界・数字に明るくなるという意味である。また経営に携わるものは常に光り輝き、会社を明るくしていく。沢山の、情報がそこに寄ってくるのである。全てにおいて明るく、真っ直ぐな心を持つ大切さを伝播しなければならぬ」と、いわゆる遠藤塾長の言葉は使命感に溢れていた。

1年前に入塾し、1塾での現役時代では人に対して感謝することの大切さを知ったという。沢山のPに参加し多くの人達と接したなかで、運転手が経営者かの選択を迫られたことがあったそうだ。お陰でトラックを降り、経営者になる決意をしたとのこと。人は人の中でしか磨かれないといわれる言葉には実感がこもる。2塾の副塾長時代には、自身の誕生日に塾生からお母様へ花束が届けられ、大変感動された

41塾

とのこと。100日修行は、やり抜いていくことが辛くなる時もあるが、共に学ぶ仲間がいればこそ乗り越えることができ、そんな仲間がいるからこそ自分があるということを体感して欲しいと言う。

新塾生にはこれから多くの出会いが待っている。出会いは経営者にとって宝である。己の殻を破り、自分の器を大きくするために、間口を広げ多くのチャンスに備えて欲しい。そして多くの人と触れ合うなかで、行動・判断を繰り返し、自身の成長、会社の成長につなげて欲しい。

4塾は実践修行の体学を通し、塾生の器をより大きく育てていく。そしてまわりを引き付ける明るい経営者を創っていく。混迷の時代だからこそ「明るい」の言葉を大切にしたい。きびしい顔の遠藤塾長がまず自らに課した「明るい」。いつも自分に厳しい遠藤塾長の12年目は既に始まっている。

(3塾 鈴木広行)



中尾晋一郎塾長

『挑戦』

「3年間学んだことを自分の言葉で伝えるだけ。新塾といっても新しいことを始めるわけではない」、4塾中尾塾長の新塾への思いは明快であった。面接では相手を知っていくうちに「なんとか力になってやれないものか」と熱が入ってしまい、「この面接からがスタートだ。今ここで自分が変わる決意をしる!」とついつい叱咤してしまう。

塾を立ち上げていく過程の中で産みの苦しみを知り、自分達がどれだけ30塾の正副塾長からご尽力を頂いていたか気が付かせてもらったという。より多くの人々の気持ちに触れ、より大きな視点で人と接するようになった。人と人の繋がりが面接という時間を通しての始まり、30年間続いていることに改めて感謝したいという。その気持ちは入塾予定者ひとりひとりに送る手紙に表れ、新塾生との新しい繋がりが確かなものとなっていく。

「直球で真剣勝負」と新塾生へメッセージを送る。いかにも中尾塾長らしい。思いも尽きることはない。「挑戦をテーマに掲げ、3年間自分の回りのもの何にでもいかに挑戦していく。ギリギリした情熱を持ちながらしっかり目標を見据え、生き活きしているイメージ。結局は己だけ。自分が強くなるしかない」自身の現役時代ともオーバーラップさせ、新塾生達がこれから体験していくことを想像するとわくわくしてしまうという。「性別、年齢、役職、業種などに関係なく、一緒に泣いて、笑って、相互啓発をしながら己を高め、一生を共にする友情を築いていく。

誰もが何かを求めて塾にやってくる。中尾晋一郎という、人のことを自分のことのように想う塾長に出会った新塾生は、勇気と決意を得て前進していくに違いない。

(2塾 牧野仁一)

42塾